

## 2016年度 大学共同研究（学長指定研究） 研究成果報告書

所属・職・氏名：社会学部 教授 吉田寿夫

研究課題：スーパーグローバルハイスクールプログラムによる生徒の内的変容の評価に関する研究

研究期間：2015年4月1日～2017年3月31日

### 研究成果概要

本研究では、以下のような基本方針のもとで、2015年3月と2015年12月～2016年1月の2回にわたってパイロット調査を実施し、SGHプログラムの効果（すなわち、SGHプログラムに参加することによって生徒たちに種々の面でどのような変容が生じるのか）について評価するための質問内容の精選や質問項目の取捨選択などを行ってきた。そして、2016年の4月～5月に、大阪府の公立高校におけるSGHプログラム採択校である、北野高校、三国丘高校、豊中高校、千里高校、能勢高校、泉北高校の2016年度入学生（延べ1396名）を対象とする第1回本調査（各生徒の、プログラムに参加する前の状態を把握するためのプリテスト）を実施した。

1) プログラムの効果の有無やその程度について判断するだけでなく、測定の目的や分析した結果についてフィードバックを行なうことがプログラムの効果の促進につながるであろうものを組み入れる。

2) プログラムに参加しない生徒の変容との比較（相対的な評価）に基づく（プログラムの効果の）検証に拘らない。言い換えれば、形成的評価を重視する（これは、どの学校においても各生徒がプログラムに参加するか否かが無作為に決定されていないことや、非参加群の生徒も評価の対象としている特性において成長が見込まれる活動に参加している学校が多いことなどにより、一般に行なわれる「プログラムに参加しない生徒の変容との相対評価に基づく検証」に多分に問題があると考えられるためである）。

3) 測定の妥当性に関わる種々の顕著な問題が想定されることから、（分析上のコストが小さく、本研究のような研究において主たる方法として採用されることが多い）評定尺度を用いた自己報告型の質問紙法だけに依拠しない（ただし、「このような方法をまったく採らない」というわけではない）。そして、コストは大きくなってしまいが、提示した事象に関する考えなどについて自由記述を求めたものに関する分析などを重視する。

以下は、第1回本調査の質問内容や各質問のねらいの概要である。

### 質問（1）

一般的に、「グローバル化」、「グローバリゼーション」とは、旧来の地域や国家の枠組みを超えて、モノ・カネ・ヒト・技術・情報などが自由に往来し、地球規模で相互依存性を深めてい

く過程であると考えられます。

あなたは、グローバル化が人類に及ぼす影響について、どのように考えていますか。あなたが考えていることを述べてください。

この質問は、SGH プログラムのもとで学ぶうえでのグローバル化についての基本的な視座を、高校生がどのように獲得し、認識しているかを問うたものである。すなわち、一義的・一面的な理解にとどまらない、知識学習に裏づけられた SGH 校生徒のグローバル概念についての相対的理解度と、それらをもとにした価値意識について把握することを目的にしている。

#### 質問（2）

現在、シリアの内戦が長期化するのに伴って、数百万人の難民が近隣諸国やヨーロッパなどに流入し、大きな問題になっています。多数の難民を受け入れている国々は、「国際社会全体で難民受け入れの負担を分かち合うべきだ」と主張しています。

日本は難民条約に批准していますが、あなたは日本は難民を受け入れるべきだと思いますか。

「受け入れるべき」、「受け入れるべきではない」、「どちらでもない」のうち、あなたが考える「日本のとるべき政策」は、どれですか。理由とともに述べてください。

この質問は、難民問題の中でも、一昨年から現在に至るまで国際的な問題として報じられる頻度が高くなる中東地域で発生している問題に関する基本的な知識と関心の度合い、また課題解決のための考え方や具体的な政策のあり方についての考えなどを問うたものである。3つの選択肢の中からいずれを選ぶにせよ、難民問題についてどれだけ基本的な知識を有し、それらに基づいて多様な判断材料を持てるか、そして、困難や葛藤を踏まえて人道的な観点からどれだけ前向きに問題の解決への姿勢や意欲を示すことができるかに着目しようとしている。

#### 質問（3）

次の文章に記されている思考に対して、あなたが思うことを自由に記述してください。

ある中学校における調査では、成績上位者 30 人の内、小学生のときに塾に通っていなかった生徒は 8 人しかいなかったそうである。このことから、小学生のときに（ないし、小学生のときから）塾に通っていないと中学校では成績上位にはなりにくいことがよく分かる。

「クリティカルな思考をすること（および、アンクリティカルな思考をしないこと）」は、種々の探求活動をする際に、先行研究で論じられていることを安易・無批判に受け入れないようにすることや、自身が得たデータについての的確で決めつけ的ではない解釈をすることにつながる、重要なものだと考えられる。また、日常生活において種々の統計的データに接する際などにも、柔軟かつ冷静な解釈をするうえで重要になる。そして、グローバルな場で活動する際にも、身につけておく必要性が高い、重要な思考様式だと考えられる。

上記の質問は、クリティカル・シンキングがどのようになされるのかについて検討するためのものである（紙幅の関係で、的確だと考えている回答および不的確だと考えている回答の具体的内容については記述を省略する）。

#### 質問（４）

英語の運用能力を向上させるために、「実際に、どのようなことを、どの程度行なっているか」を問うた、８項目から成る、選択法による質問である（ただし、英語以外の言語の運用能力を向上させるために自発的に行なっている活動に関する、自由記述法による質問も含んでいる）。

#### 質問（５）

世界または日本の現状や歴史、望ましい社会のあり方などといったことに関する知識を得たり、考え方を広げたり深めたりするために、「実際に、どのようなことを、どの程度行なっているか」を問うた、７項目から成る、選択法による質問である。

#### 質問（６）

「開発途上国の人や（国内・国外にかかわらず）困窮している状態にある人などを支援すること、または、世の中を望ましい状態にすることにつながるであろう活動を、実際に、どの程度しているか」を問うた、３項目から成る、選択法による質問である。

#### 質問（７）

「地球規模で社会に貢献する、または、国際的な場で主導的な役割を担って活躍する」といったことに関わるであろう事柄に関する種々の認識・信念や態度・動機づけ（志向性）などについて、２０項目から成る、評定尺度法と呼ばれる方法で回答を求めたものである。「国際的な問題・社会全体の問題への関心、積極的・協調的・公正に活動ないし関与しようとする姿勢」、  
「異文化間接触・国際的な活動をすることへの志向性」などを測定・評価の対象としている。

以上の第１回本調査に対する回答に関して、質問（１）～（３）の自由記述法によるものについては回答を概読するとともに、質問（４）～（７）については、各項目における度数分布表の作成や平均値および標準偏差の算出といった単純集計を学校ごとに行なった。そして、それらの結果を参照するとともに、大阪府教育委員会および各高校からの要望を考慮して、第１回本調査の質問紙に加筆・修正を施し、２０１７年度入学生を対象とする第２回本調査（第１回と同様、各生徒の、プログラムに参加する前の状態を把握するためのプリテスト）の質問紙を作成した。作成した質問紙および実施要領は添付の資料の通りであり、本年４月～５月に、この調査を実施する予定である。